

東京工業大学 窯業同窓会

会 員 名 簿 (昭和52年8月現在) 会 誌

窯業同窓会
〒152 東京都目黒区大岡山2-12-1
東京工業大学 工学部 無機材料工学科
加藤 研究室気付
Tel (03) 726-1111 内2518

東京工業大学

窯業同窓会 会 員 名 簿 目 次

五十音順名簿索引
職場別名簿索引
年度別卒業生名簿
在学生名簿
論文博士会員名簿
東京工業大学窯業関係職員名簿

クラス連絡員名簿

大 4	米 谷 忠次郎	昭 16: 3	赤 沢 次 男	昭 30	長谷川 安 利
大 5	各 務 鉦 三	昭 16:12	加 藤 政 良	昭 31	中 島 節 治
大 6	赤 塚 幹 也	昭 16 技	浅 野 修 二	昭 32	西 晴 哉
大 9	飯 塚 誠 厚	昭 17	金 森 隆	昭 33	山 岸 茂
大 11	石 塚 正 信	昭 17 技	荻 原 淳 治	昭 34	武 孝 夫
大 12	若 林 滋	昭 18	奥 田 進	昭 35	猪 股 吉 三
大 13	山 内 俊 吉	昭 18 技	居 上 英 雄	昭 36	高 宮 陽 一
大 14	倉 田 元 治	昭 19	近 藤 連 一	昭 37	大 川 恒 雄
大 15	水 地 満 穂	昭 19 技	後 藤 九 五	昭 38	井 関 孝 善
昭 2	小 島 豊之進	昭 20	新 居 善三郎	昭 39	後 藤 誠 史
昭 3	松 崎 錠 三	昭 20 技	堤 矩 雄	昭 40	前 田 敏 勝
昭 4	大 石 信 男	昭 21	鈴 木 弘 茂	昭 41	松 沢 素一郎
昭 5	野 口 長 治	昭 21 技	小 山 保二郎	昭 42	片 淵 信一郎
昭 6	真 保 義 郎	昭 22	遠 藤 幸 雄	昭 43	秋 山 豊
昭 7	森 谷 太 郎	昭 23	浜 野 健 也	昭 44	中 川 敏 夫
昭 8	戸 田 文 雄	昭 23 専	名 取 賢 荘	昭 45	岡 部 淑 夫
昭 9	白 石 清 梧	昭 24	佐野川 建	昭 46	田 村 信 一
昭 10	桧 山 真 平	昭 25	菊 地 央	昭 47	犬 飼 崇 雄
昭 11	稲 村 泰	昭 26	亀 井 四 郎	昭 48	加 藤 拓
昭 12	尾 野 勇 雄	昭 27	宇田川 重 和	昭 49	加 山 恒 夫
昭 13	田賀井 秀 夫	昭 28 旧	柳 正 光	昭 50	前 田 榮 造
昭 14	福 井 哲	昭 28 新	堀 江 勲	昭 51	宮 田 勉
昭 15	素 木 洋 一	昭 29	原 田 賢	昭 52	夏 目 幹 子

五十音順名簿索引

★：確認済

X：物故者

会員資格記号

分類	凡例	略号
東京職工学校	明治35年卒業	明35
東京工業学校	大正13年卒業	大13
東京高等工業学校	昭和4年卒業	昭4
旧制大学時代 (昭和7年～昭和28年)	昭和15年学部卒業	昭15学
	昭和21年選科卒業	昭21選
	昭和19年工業技術員養成所卒業	昭19技
	昭和23年附属専門部卒業	昭23専
新制大学時代 (昭和28年～)	昭和40年学部卒業	昭40学
	昭和42年大学院修士課程修了	昭42修
	昭和45年大学院博士課程修了	昭45博
在学生	大学院博士課程2年次在学	D2
	大学院修士課程1年次在学	M1
	学部3年次在学	B3
職員その他	博士論文提出による会員	論
	現職員	職
	元教官	元

*本科、選科の区別はしていない。



試3 旭焼、額皿（山水画）

旭焼はワグネル先生創作になるもので、日本古来の絵画描法を釉下に施した美術的価値の高い低火度焼成陶器です。先生は明治18年には農商務省の補助を得て赤坂葵坂に試験工場をつくり、吾妻焼と命名しましたが、明治20年に設備を東京職工学校に移して旭焼と改称しました。写真の品は明治26～27年頃の試作品です。

会誌の平野陶磁器コレクションの項参照。

故人になられた元教官

物故教官生前の功績を称え御冥福を祈る。

ゴットフリード・フォン・ワグネル	X	中 沢 岩 太	X
藤 江 永 孝	X	高 山 甚太郎	X
加 福 均 三	X	植 田 豊 橘	X
内 海 三 貞	X	大 谷 謙 一	X
内 藤 道太郎	X	安 田 禄 造	X
浅 井 郁太郎	X	中 田 清 次	X
芝 田 理 八	X	田 端 耕 造	X
岩 田 恒三郎	X	三 浦 武 男	X
不 破 橘 三	X	熊 沢 治郎吉	X
藤 井 光 蔵	X	黒 田 泰 造	X
山 寺 容 麿	X	太 田 能 寿	X
細 木 松之助	X	武 藤 三 枝	X
高 松 豊 吉	X	滝 田 岩 造	X
北 村 弥一郎	X	塩 田 力 蔵	X
三 角 愛 三	X	中 尾 万 蔵	X
杉 健 一	X	平 野 耕 輔	X
近 藤 清 治	X	大 友 作之丞	X
古 山 六 郎	X	奥 田 誠 一	X
金 島 茂 太	X	伊 藤 善 高	X
川 崎 正 男	X	板 谷 波 山	X
宮 川 愛太郎	X	榎 本 修 二	X
大 野 政 吉	X	佐 藤 三 平	X
吉 木 文 平	X	吉 田 博	X
富 山 国之助	X	橋 本 謙 一	X

窯業同窓会会誌

第14号目次

東京工業大学窯業同窓会の沿革
窯業同窓会規約
昭和52年度役員名簿
ご挨拶 会長 山内俊吉
学長に就任するに際して 齋藤進六
訃報
嘉悦 新氏の思い出 田辺三郎
松本昌蔵氏の逝去を悼む 高橋久男
茂木今朝吉氏の思い出 森谷太郎
昭和51年度 総会および懇親会
昭和50年度 収支決算報告
昭和50年度 事業資金寄付者芳名
昭和52年度 総会および懇親会
昭和51年度 収支決算報告
昭和51年度 事業資金寄付者芳名
第14回 Dr. G. Wagener 記念公開学術講演会
ワグネル先生記念碑の改修について
平野陶磁器コレクションについて
東京工業大学における窯業教育の歴史的経過
大岡山通信

東京工業大学窯業同窓会の沿革

本会は蔵前時代の東京高等工業学校窯業科第 1 回生以来同窓親睦の会として発足し、大正時代には鳥又會と称して、洋行および帰朝の送迎会や、地方から上京の同窓を迎えて懇親会を開いていたが、昭和の始め頃に愛窯會となり、昭和 8 年には窯業同窓會となった。さらに昭和 18 年に八日會（窯化會に通ずる）と改称して毎月講演と懇談の会を催していたが、太平洋戦争の戦局の悪化とともにその活動は中断された。しかしながら、戦後の昭和 22 年に、会名を再び窯業同窓會と改称して活動を再開し、第 1 回の会員名簿を発行した。それ以来同窓会は年と共に発展し、毎年総会および懇親会を開き、ほぼ隔年毎に同窓会会員名簿を発行して現在に至っている。窯業同窓会は東京工業大学の窯業関係者、具体的には、窯業関係の卒業生、在學生、現職員および元教官その他で構成されている。

窯業同窓会規約

1. 本会は窯業同窓会と称する。
2. 本会は会員相互の親睦を図り窯業界の向上発展を期するを以って目的とする。
3. 本会は事務所を東京都目黒区大岡山東京工業大学内に置く。
4. 本会は第 2 条の目的を達成するために左の事業を行なう。
 - (1) 窯業技術懇談会
 - (2) 見学会
 - (3) 名簿の発行
 - (4) その他幹事会において必要と認めた事業
5. 本会々員は東京工業大学窯業関係者を以って組織する。
6. 本会の経費は、会員その他よりの事業寄付金、その他よりの収入をもって支弁する。会計年度は毎年 4 月に始まり翌年 3 月に終る。
7. 本会は毎年度始めに総会を開き左の事を行なう。
 - (1) 会務の報告
 - (2) 役員の変更
 - (3) 規約の改正
 - (4) その他
8. 本会に左の役員をおき任期は 2 ケ年とする。但し再選は差支えない。
 - (1) 会長 1 名
 - (2) 副会長 若干名
 - (3) 幹事 若干名
 - (4) 常任幹事若干名
9. 会長、副会長および幹事は総会で選出する。常任幹事は幹事の互選とする。
10. 会長は本会を総理し、副会長は会長事故ある時、代行する。常任幹事は会務（庶務、会計）を処理する。幹事は本会の重要事項を審議し、常時地方各職場並びにクラス等の状況、移動および本会に対する意見等を通報するものとする。
11. 本会は相談役をおくことができる。相談役は役員会において推薦し、総会において承認をうる。
12. 本会に支部を置くことができる。支部は本部と連絡を密にし、本会の発展に協力する。
(昭和 52 年 5 月の総会において一部改正)。

昭和52年度役員名簿

会 長 山 内 俊 吉

相談役 伊 奈 長二郎

鮎 川 武 雄

副会長 倉 田 元 治

石 塚 正 信

江 副 勇 馬

大 石 信 男

中 山 一 郎

森 谷 太 郎

幹 事

加 藤 政 良

田 中 弘

奥 田 進

愛 甲 昇

梅 田 夏 雄

大 庭 宏

加 藤 守 光

遠 藤 幸 雄

田 代 仁

奥 田 博

鈴 木 哲 夫

藤 井 豊 和

伏 野 勅 明

牧 村 信 之

浅 野 正 和

亀 井 四 郎

長谷川 安 利

田 村 信 一

井 関 孝 善

山 根 正 之

中 川 善 兵衛

上 西 義 介

太 田 京 一 郎

常任幹事

庶 務 齋 藤 進 六

加 藤 誠 軌

木 村 脩 七

会 計 小 坂 丈 予

名 取 賢 荏

ご挨拶

会長 山内俊吉

同窓の皆さまは、この多難の時に際会し夫々の立場でご奮闘中のことと思います。同窓会も皆さまのご支援ご協力によりまして有形無形の活動をつづけております。

丁度本年度は名簿・会報発行の年であり齊藤進六、加藤誠軌両常任幹事を中心として正確な名簿、よい会誌をつくる為常に努力を重ねていただき、ここに発行の運びとなり心から感謝している次第であります。

51年度の総会は幹事特に地元の幹事の方々の並々ならぬ、お骨折りにより大阪市北区道本町の大東洋で開催、52年度は東京平河町の都道府県会館で開催され共に極めて盛大な会であり大正15年、昭和2年卒業の方々の卒業50周年を祝い、いつものように会員加藤鈔氏の立派な作品を記念として贈呈いたしました。これらの記事や大岡山通信その他の記事については本会報をご覧くださいと思います。なお名簿・会報に関しお気づきのことなどがありますなら、お知らせいただきまして今後さらに喜ばれる名簿・会報にするための参考にさせていただきますのでご協力のほどお願い申し上げます。

次に引きつづき、私にさらに会長をやれとのことですが今迄のように宜しく願いいたします。

次に皆さまと関係深いワグネル先生記念碑の補修の件についてご報告申し上げます。

昭和11年故ワグネル博士記念事業会が発足し先生の記念碑を先生と最も関係の深い東京工大内に設置して先生のご功績を広く世に顕わし、もって追慕報恩の意を表わしたいということになりました。そして、ひょうたん池の畔に建設され昭和12年11月8日その除幕式が行われました。

(詳細はワグネル先生追懐集にゆずる)

ところが終戦前後記念碑地帯が著しく荒廃し、記念碑の先生の陶製胸像(以下陶像と呼ぶ)も可なり破損しました。

よく同窓の方々が大学に見えてその補修について注意され、いつも気になって仕方がなかったのであります。この陶像は可なり的大型であり、陶彫の大家で当時京都陶磁器試験所の故沼田一雅先生の作であり、その焼きあげは伊奈製陶株式会社で行われ、それと同じ陶像が会社に大事に保存されているときいておりました。

丁度3年程前大倉和親記念財団の表彰並に研究費の贈呈式にご参列の伊奈製陶専務伊奈輝三氏(東京工大経営卒)が見えていたのでワグネル先生の陶像複製のことをご相談申しあげました。全氏は帰って話してみるとのご返事でした。帰られて伊奈長三郎会長(東京工大後援会の寄付者)、田辺三郎社長、大岩副社長等とご相談の結果、最近この種の製品は作っていないが何とか努力してみようのご返事をいただき誠にありがたいと思う一方、大変な仕事をお願いして申訳なく思いました。早速大学当局並に窯業関係教授と談合の上会社に正式にその製作方お願いいたしました。

会社では熱心に陶像複製への努力を重ねられ原陶像に劣らぬ立派な陶像の製作に成功され、先般大学に寄付していただきました。まことにありがたいことで関係者一同心からの感謝を捧げた次第です。近く大学当局の手によって記念碑の陶像が取換修復される予定です。

終りにこの世界的不況のあらしの中にあって今後とも同窓の皆さまが、さらにご健康で夫々の分野で充分ご活躍下さいますようお願いいたします。ご挨拶といたします。

(昭和52年8月)

学長に就任するに際して

齋藤進六



旧窯業研究所，それが旧建築材料研究所と合併して出来た工業材料研究所は，実に奇妙な研究所である。現在，部門の数は8部門，それに昨年出来た半部門相当の水熱合成材料実験施設を加えて，実勢8.5部門，東工大に附置されている4つの研究所の中でも最も小さく，いわんや理学部，工学部に較べたら，その5分の1，10分の1にも満たない。長津田に創設された我国はじめての大学院研究科のみの——すなわち，下に学部をもっていない——総合理工学研究科は，専任の教官からなる基幹講座と併任の教官からのみなる協力講座から成っているのので，その構成員数の数え方は複雑であるが，その基幹講座のみをとっても工材研の3倍近くになる。要するに工材研は，東工大に於て最もチビな教官組織ということになる。

しかし，この研究所が実に奇妙であると書いたのは，そもそも，その誕生からの縁起にあるらしく，その誕生と同時に，僅かその当時4.5部門の劣勢を率いて山内俊吉先生が学長選挙に勝ち抜いて学長になられた。当時は工学部だけの単一学部制で，その窯業学科の絶大な協力があつたとはいえ，小数派の材料分野から学長を出した嚆矢であつて，これは工材研に，全学的に特異な位置づけを与えたといつてよい。しかも山内学長が所謂MITシステムをやや軽率に取り入れて来た終戦以来の制度を全面的に改めたのは，今日の東工大が大きく成長した最も重要な布石を打つたものである。その次に工材研が学長を生んだのは，周知のごとき全国的学園紛争の真只中で実吉学長，斯波学長と混乱をきわめた動乱を見事に收拾した加藤六美学長である。加藤学長は元来東工大建築の教授であつたが工材研の所長となつた時は，前任者田賀井秀夫所長と所長選挙の結果同票

となり，年齢が僅かに多かつたので申合せ事項に基いて所長になつたという数奇な想出があるが，斯波学長が任期の途中で退任してしばらくの間，学長事務取扱に指名された頃は紛争の最も危険な時であつた。そして，加藤学長は単に動乱期の指導者としてのみならず，東工大の長津田新キャンパス創設という難事業の路線を見事に敷いたことは平常期の建設者としても卓抜な力を示されたといえよう。

このように数えて来ると，終戦後の和田，内田，山内，大山，実吉，斯波，加藤及び現川上学長を受けて，私は図らずも，山内先生，加藤先生の光榮ある工材研の伝統を受けて，終戦後9代目の学長に来る10月24日からなるわけであつて，この小さな研究所が9代のうち3代までの学長を出したという歴史的廻り合せに睦きながらも，又，その2代の学長が，いずれも東工大の歴史の中で素晴らしい実績を残されたことに，果して我身がついて行けるかと，やや困惑の体でもある。

今日の東工大は，ある意味では，もう一つ総力をあげて越えねばならない重大な危機にあるともいえる。それは，全学的総意をもつて事に當つた長津田地区建設という大事業が，大方目鼻がついた時期に当然予想されるころの今まで陰に隠れて噴き出なかつた幾つかの歪が頭をもたげて来ることであり，それは特に大岡山地区の研究と教育の体制の見直しとして早急に考えて行かなくてはならないであろう。それと同時に，今まで同一地区に集まっていたために問題にならなかつた部局間の交流，教官間の意見の疎通がともすると，本来互に協力すべき二つの地区が，別々の動きをとりがちな傾向も生れるであろう。これには，東工大が巨大な技術家集団としての自負をもつて，まず技術面な解決を両地区交流の中心にすえなくてはならないだろう。と同時に，長らく単に東工大の工学部が預つてその運用を依託されて来た田町地区にも時代に相応した研究教育のセンターを創るという構想を現実のものとして行かねばならないだろう。

だが東工大は常に前進し，発展するだろう。私の学長任期中に建学以来100周年の行事がある。広く同窓会の皆さんにも参加を願い，その支援を得て，慶賀すべきその祝典を更に榮あるものになりたい。山内先生も益々御元氣なので，今後一層の御叱正を得て，その伝統ある路線を進んで行きたいと念願する。

(昭和52年9月24日長崎にむかう列車の中で)

訃 報

この2年間に、以下の方々が故人となりました。謹んで哀悼の意を表します。

大庭三郎氏	大正4年卒業	安芸静一氏	昭和6年卒業
城島守人氏	大正5年卒業	中村義夫氏	昭和6年卒業
小野田勝男氏	大正6年卒業	茂木今朝吉氏	昭和7年卒業
藤井達人氏	大正8年卒業	池田卯一氏	昭和14年卒業
嘉悦新氏	大正9年卒業	堅田尚氏	昭和15年卒業
山田精吾氏	大正10年卒業	小熊守氏	昭和19年卒業
松本昌蔵氏	大正11年卒業	山本昭典氏	昭和23年卒業
小笠原吉彌氏	大正12年卒業	伊藤登氏	昭和24年卒業
坂本有文氏	大正13年卒業	今村敏行氏	昭和27年卒業
保野福太郎氏	昭和5年卒業	森彰氏	昭和49年卒業
木村一男氏	昭和5年卒業		

嘉悦 新氏の思い出

伊奈製陶株式会社
取締役会長 田辺三郎



嘉悦さんが亡くなって早や2年になる、享年76才。先日その三回忌が営まれた。改めて往時の元気な姿が眼に浮ぶ。同氏は熊本県山鹿市の生れ、東京工大の前身東京高工窯業科を大正9年卒業、愛知県常滑市の伊奈製陶に入社された。同級生には伊藤亮、飯塚誠厚、上田滋穂、鈴木巳代三の諸氏があるが多くは物故された。そして同社の主要製品であった陶管、電纜多孔管の製造販売に従事

され、全国各都市を遍歴された。ちょうど同社の創成期に当り苦勞を重ねられたのである。若き日の氏は九州男子の本領を發揮、仕事もやるが遊ぶことも人並以上であったと聞く。酒もかなり嗜む方で身体こそ大きくないが豪放の性格であった。第二次大戦では既に壮年であったが陸軍少尉として応召、やがて無事生還。戦後同社が始めた衛生陶器製造に従事された。その生涯で2回ほど健康を害して入院療養されたことがある。専務取締役を最後に退任後は参与として悠々自適の日を送られた。信夫人との間に四男四女の子福者であり、それぞれ成人して一家を成している。特に長男啓允氏は現在同社取締役として勤務され父君の跡をつがれており、このことは氏としてもさぞ満足していると思われる。厳しさの中にも優しさを持ち、私としては一番話し易い先輩でいろいろお世話になった。改めて当時を思い出してこの稿を終りたい。

(ご遺族現住所：常滑市字西平井13の2)

松本昌蔵氏の逝去を悼む

高橋久男



同窓の親友、松本昌蔵君が忽然として天国に旅立たれた。今年の二月十八日の午後、私は外出先から吾家に電話をしたら、松本さんが入院されたとの報を受けた。共に西荻窪駅の北と南に住み、事業の事、懐具合の事、家庭内の出来事など実の兄弟以上に親しく語り合い、協力し合って来て、しかも十日程前にも、私の家に見えられ、新年の挨拶を兼ね歓談して別れた許なのにと、直に病院に馳せ付けたが、そこでは既に点滴を受けておられ、私を見ると洞の眼を開いて、大変嬉しげに何か話されたが、私には其の意を十分に聞きとれなかった。餘りの痛わしさに、廿分位で辞したがそれが最後の面会であった。私が帰って間もなく昏睡に陥り、其夜十一時四十五分、御家族に見守られ乍ら逝去された由。享年八十二才御齡にも似合はず頗る頑健で、一冬に一二回喘息で苦しまれる外、医者のお世話になるを嫌い、現役で「千代田化学研究所」を主宰、研磨砥石の製造に全智を打込

み趣味の碁に慰安を求め、短軀よく奮闘せられておられたが、仮初の風邪に喘息を再発され、結局は心不全で不帰の客となられたとの事である。

松本君は富山県八尾町の産で、苦学力行大正十一年窯業科を卒業、福岡県黒崎の中央セメントに就職されたが、同社が小野田社に合併された後、小野田本社、岩手県の大船渡工場に勤務せられた。被合併社員の悲運を悉に体験せられ、独立の志を立て昭和十二年退職し、東京の杉並区に歯科用セメントの製造工場を設立された。然し戦争期に直面原料の入手難にて廃業の己むなきに至り、其後鉄工場とかポマード製造等を試み大変苦勞されたが、我国研削砥石の権威故熊谷直次郎博士の知遇を受け、三井金属の研磨砥石の下請工場を営む事になった。そこに故遠藤隆雄氏（昭四）楠井堅三氏（昭十六）等蔵前同窓の方々の、応援の下に彼の性格の誠実温厚さを買われ着々実績を挙げ、荻窪工場の手狭に、私が御世話して茨城県岩井市に新工場を建設、今日の盛大を齎すに至ったのであった。現在は御養子吉永君に経営を任し、自らは会長として砥石の製造技術の指導に采配を振るっておられた。

誠に氏は天国に行かれたが、残された事業は良き後継者に恵まれ、今後共益々発展せらるゝ事であらう。茲に同氏の御逝去を悼み、同氏の功績を讃えて、追悼の意を表する次第であります。

（ご遺族現住所：東京都杉並区善福寺 1-2-6）

茂木今朝吉氏の思い出

森谷太郎



茂木君の訃報に接したとき、ちょっと信じられなかった。平素至って元気であった彼であったので、まさかと思った。私が彼を知ったのは昭和4年東工大に入った年であった。名簿の順が隣合っていたので、クラスの人達の中で一番早く知り合った。彼の性格は几帳面で彼と語るときはいつも真面目な話題に終始することが多かった。

放課後には洗足池の畔に身を横たえて将来を語り、また清風そよぐ多摩川堤を散策しては大学生活や人生論などを大いに語っては青春を楽しんだが、今は遠い思い出となってしまった。

我々が大学を卒業した頃は世の中の経済状況も悪く、就職は必ずしも容易ではなかったが、彼は卒業後直ちに東京工業試験所に入り基礎的研究に従事するようになった。その頃から世界情勢も急速に不安定となり満洲事変から支那事変へと戦局は発展し、彼もまた戦場へと出征して行か

なければならなかった。戦況は毎日のように新聞紙上に報道された。ある日「茂木今朝吉少尉戦死」の記事を紙上に発見し、愕然とした。あとでこれが誤報であったことを知ってホッとした。が、彼は足に負傷して内地に護送され広島陸軍病院にて治療を受けていることを知らされた。その当時私は陸軍省衛生材料廠の天辰大佐から依頼され義眼ガラスの研究に従事していた。天辰大佐は義眼の他に義手や義足の研究の責任者であり、また東京第一陸軍病院（現国立病院医療センター）の薬剤部長でもあった。そこで茂木君の養療は広島より東都の方が何かと便利ではないかと考え、天辰大佐に懇願して東京第一陸軍病院に移れるように配慮していただいた。願いがかなって、天辰大佐の居室で、久しぶりで茂木君の元気な姿と再会できたことを嬉しく思った。白衣は着ていても青年将校らしい凛々しい姿勢に心から安堵し、帰還を祝福したのであった。

彼が千葉大学教授、武蔵工大教授を歴任し、研究と教育に業績を挙げ、また千葉大学工学部長として大学行政面にも貢献したことは御同慶の至である。これから悠々自適の生活ができるというとき急逝されたことはまことに無念である。ここに彼の思い出の一端を綴るに当り、謹んで氏の御冥福を祈る次第であります。

（ご遺族現住所：東京都世田谷区奥沢町 1-25-14）

昭和 51 年度総会および懇親会

昭和 51 年度の総会と懇親会は久しぶりに大阪
市北区道本町の大東洋で、72 名の出席者を得て開
かれた。

総会は浜野常任幹事の司会で、会務報告と会計
報告が承認され、次期役員については会長に一任
された。

ついで、大正 15 年卒業の田崎清司、前波余子、

水地満穂、吉川俊吉の各氏に、卒業 50 周年記念品
(加藤鈔氏の作品) が贈られた。

引続いての懇親会は、会場の設営にあたった梅
田夏雄幹事の司会で進められ、中華料理のテー
ブルを囲んで古い昔の思い出話や近況報告などが
続き、8 時過ぎ盛会裡に散会した。

昭和 50 年度収支決算報告

(昭和 51 年 3 月 31 日現在)

収 入 の 部

前年度よりの繰越金	386,802 円
懇 親 会 費	284,000
名 簿 代	298,000
事 業 資 金	421,000
広 告 代	800,000
銀 行 利 子	6,996
	<hr/>
	2,196,798

支 出 の 部

記 念 品 代	45,000 円
総会・懇親会費	349,790
謝 礼 (名簿・総会)	63,400
印 刷 代 (名簿・総会)	678,600
通 信 費	202,830
慶 弔 費	23,880
会 合 費	56,830
雑 費	28,150
為 替 料	170
	<hr/>
	1,448,650
差 引 残 高	748,148

昭和50年度事業資金寄付者芳名

(敬称略)

10,000 円

山内 俊吉 倉田 元治 江副 勇馬 江口 愛二 鮎川 武雄

5,000 円

小島豊之進 福井 哲

4,500 円

中山 一郎

4,000 円

芝原 雅彌 森谷 太郎

3,000 円

中村 義夫 真保 義郎 真田 義彰 加藤 正之 岩切 一良 田上 嘉秋 吉田 一栄

木島 昇 石井 峰郎 中村 厚 亀井 四郎 長谷川安利

2,500 円

石野 幸三 中村 周清 斎藤 勝一 加藤欽一郎 田辺 昌之 速水多根雄 水地 満穂

桑原 直輝

2,000 円

大塚 淳 井上 圭吉 伊藤 正三 荒井 康夫 坂田 正 斎藤勝一郎 中村 義郎

厚見 昌弘 藤井 稔 花沢 孝 日笠 泰行 宮崎 秀甫 毛利 尚彦 安保 英司

中川 順吉 高宮 陽一 藤井 透 宗宮 重行 江藤 哲夫 大場 立夫 樋口松之助

原田 賢 中川 敏夫 松田 弘 出口 茂 磯貝 純 素木 洋一 西川 洋成

岩瀬 滋 茂木今朝吉 成田 正 中沢三知彦 堀口 順康 福崎 福七 田村 忠臣

加藤 琢也 古丸 勇 田山 精一 水野 茂樹 大石 信男 松本 哲雄 安田 圭

1,500 円

毛利 純一 高浜恒一郎 西野 忠 上田 政夫 太田 千里 矢島一治男 福井 博(20 卒)

福井 博(27 卒) 鈴木 節三 尾島 正男 堀江 鋭三 大庭 宏 山本 登 海老 昱雄

古賀 義根

1,000 円

井出 善彌 角田 頼保 鈴木 重夫 山中 一郎 野口 長次 西田 一雄 国吉 五六

宇野 達路 尾野 勇雄 佐々木茂弑 笹沼宗一郎 田賀井秀夫 友田 正雄 吉田 格

小泉善之助 河井 信雄 境野 照雄 田中 広吉 奥田 進 内藤 隆三 近藤 連一

梅田 夏雄 塩川 浩 浦 清次 鈴木 弘茂 遠藤 幸雄 長谷川 泰 浜野 健也

牧村 信之 秋山 方宏 名取 賢荘 山下 透 杉浦 孝三 川浪 重年 松永 一郎

井関 孝善 山根 正之 木村 脩七 中川善兵衛 斎藤 進六 加藤 誠軌 小坂 丈予

末野 悌六 瀬高 信雄 愛甲 昇 奥田 博 華房 嘉勝 伏野 勅明 岩崎 嘉助

宇田川重和 柴田 茂 油田 恒夫 田中 博一 柴田 景介 近藤 良一 高橋健太郎

高山 泰造 今間 朋春 塩田 政利 佐藤 功 飛川 晨 木村 勲 岡田 昌三

江川 弘水 中村 能一 大津賀 望 沢野 清志 前田 敏勝 貫井 昭彦 磯部 光正

青木 秀希 浅田 敬徳 田中 貞夫 石川 演慶 居上 英雄 飯田 利平 岡崎 洪

内山 浩	犬飼 崇雄	梅原 一正	新居善三郎	太田 達雄	池田 卯一	五十嵐幹治
小片 仁	漆戸 秀守	今泉登喜次	一色徳一郎	大矢 真吾	伊藤 公芳	有馬 一喜
川上 辰男	小岩井忠道	小林 晃	島村 弘三	五月女好司	竹沢 義郎	塚原 修一
戸田 文雄	竹村 章	田中 司	田中 満生	中村 紀夫	中村 純一	中村 敦
成瀬 庸一	中村 八助	福堂 勇夫	長谷川保和	浜野 宏輝	平井 修	花岡 則和
肥田 権平	藤井 正雄	松山 城仁	森田 直文	増田 稔	村杉 忠信	横瀬 信次
山崎 亨	山崎 俊雄	若島 喜和	前波 余子	渡辺 永	足立 保彦	新井 博之
毛健 二郎	石塚 正信	大山 武	萩納 淑	上野 三郎	遠藤 敏夫	石井 鉄彌
雨宮 正	越前谷民雄	大牟礼 勝	尾野 幹也	小尻 由三	笠原 理	後藤 九五
桑原 清治	堅田 新一	菊地 直機	河田 幸司	桑山 則彦	加藤 健造	斎藤 永吉
佐野川 健	島宗 孝之	斎藤 康行	佐伯 威夫	土屋 弘	田中 弘	田村 信一
高田 利彦	伴野 紘司	豊島 恭	俵 余志夫	田代幾太郎	巽 昭夫	高橋紘一郎
田平 伸生	塚本 行	中村 俊郎	中川 邦好	長岡 為行	西元 三郎	中村 宏昭
細井 久孝	藤井 重信	森川 良一	森 元邦	保野福太郎	横溝政太郎	山本 英龍
横山 武	山本 博	柳田 洋明	山形 安一	吉川 俊吾	星野 芳夫	佐藤 正雄
500 円						
丹羽 誠	中川 真澄	倉本 透	足立原純一	和泉 正光	山本 光雄	吉谷川 貢
牧島 亮男						

合計 421,000 円

昭和52年度総会および懇親会

昭和52年度の総会と懇親会は5月10日、窯業協会の年会会場に近い都道府県会館の本館6階大会議室で、百余名の出席者を迎えて盛大に開かれた。

総会は加藤常任幹事の司会で進められ、会務報告と会計報告が承認され、次期役員については会長の留任が決まり、その他役員は会長一任となった。

ついで、昭和2年卒業の伊奈辰次郎、飯田利平、岡本十郎、小島豊之進、小林力、佐々木精、斉藤久明、松田与七、吉田寛一郎、荒井富次郎、以上10名の方々に、卒業50周年記念として、例年の通り、加藤鈔氏の作品が贈られ、山内会長の祝辞があった。

引続いての懇親会は長谷川安利幹事の司会で進められ、新入会員の紹介や小坂丈予教授の西之

島新島の16mm映画などをおりまぜて、8時過ぎまで賑やかに楽しい思い出と語らいのひとときを過ごした。



昭和51年度収支決算報告

(昭和52年3月31日現在)

収入の部

前年度よりの繰越金	748,148円
懇親会費	232,000
名簿代	16,000
事業資金	579,000
銀行利子	14,946
	<hr/>
	1,590,094

支出の部

記念品代	20,000円
総会・懇親会費	266,500
印刷代	78,800
通信費	58,120
謝礼	11,000
会合費	91,380
雑費	6,050
	<hr/>
	531,850
差引残高	1,058,244

昭和51年度事業資金寄付者芳名

(敬称略)

10,000円	山内 俊吉 西田 一雄	倉田 元治	江副 勇馬	長崎 勸	鮎川 武雄	石塚 正信	島岡 達三
5,000円	伊藤 幸人 田崎 清司 村上三五朗	茂木 朝雄 中山 一郎 岩崎 嘉助	森谷 太郎 若林 明 中村 敦	斉藤 元良 鈴木 重夫 真保 義郎	吉武 素水 河嶋 千尋 正田清一郎	若林 滋 各務 敏三	星野 勉 樋口松之助
3,000円	三沢 賢一 菊池 央 福井 哲	深田 義 田山 精一 柴山 景介	毛利 純一 後藤 九五 長崎 準一	岩崎 郁夫 美崎 敬之 松田 弘	石野 幸三 中川 順吉 長谷川安利	小島豊之進 長谷 正義	塩田 政利 宇野 達路
2,000円	井出 善弥 梅田 夏雄 吉川 俊吾 日下部中治 森井 良一 中村 厚 矢島一治男 成田 正 中村 周清 田辺 昌之	大石 信男 大井修一郎 末野 悌六 齐藤 勝一 飯塚常太郎 窪田 三郎 村杉 忠信 安保 英司 新居善三郎 安竹 了和	水野 茂樹 柴田 茂 井関 孝善 佐沢 光夫 福井博(27卒) 竹沢 義郎 羽田 晃治 加藤 博之 丹羽 誠 酒井 利和	杉浦 正敏 伏野 勲明 角田 穎保 日笠 泰行 岩田 俊喜 加藤 守光 海老 昱雄 藤村 善登 川田 尚哉	田代 仁 井上 圭吉 小坂 丈予 入江日出男 山浦礼次郎 坂野 義郎 飯田 利平 真田 義彰 芝原 雅弥	加藤 政良 浜野 宏輝 張 鴻烈 鈴木 正義 村上 光一 富田 毅 猪股 吉三 齐藤 永吉 松崎 錠三	田中 弘 中沢三知彦 山本 博孝 伊藤 正三 西元 三郎 厚見 昌弘 鈴木 節三 安永 暉義 飯塚 誠厚
1,500円	横山 武						
1,000円	坂田 正 奥田 進 吉谷川 貢 名取 賢莊 川上 辰男 小林 力 佐藤 功 三島 清敬 肥田 権平 川本正一郎 水野 章 越前谷民雄 小泉善之助 中辻 正信 矢田部俊一 足立 保彦 高野 忠 戸谷 陽一 横溝政太郎 吉田 格 内藤 義一 横内 重隆 宇都宮泰造 一色徳一郎 前川 清三 山本 博 森 正信 青木 進 木戸 雄二 吹田安兵衛 花田 明	加藤 正之 延 義之 岡田 明 倉田 貢 滝沢 進 川口 敏夫 水池 満穂 鵜飼 喬介 中村藤一郎 山本 孝彰 花岡 則和 長岡 為行 伊奈辰次郎 梅原 一正 米谷忠次郎 加藤 健造 臼井 芳一 成瀬 庸一 小玉 正雄 古丸 勇 荒井 康夫 木村 一男 小川 秀治 畠田文比古 小出 一哉 持田 滋 上野 三郎 足立原純一 桑原 直輝 白土 一男 杉浦 孝三	田辺 三郎 荒川 正治 井上 昭 大場 達夫 柳田 洋明 松永 一郎 浅見 進一 巽 昭夫 宮崎 秀甫 出口 茂 山崎 俊雄 田端 精一 藤井 正雄 山本 次郎 木村 勲 石川 演慶 大木 通胤 清水 広 日浦 致 福崎 福七 白川 清 河原田次剛 今間 朋春 沢岡 昭 加藤 春美 山田耕一郎 大藪 周三 内藤 隆三 中村 俊郎 山根 正之 伊藤 国彦	尾野 勇雄 浜野 健也 中川善兵衛 近藤 連一 析本 賜 森川日出貴 石橋 和史 牧島 亮男 植松 伸二 開田 丈夫 岩佐 宇一 山下 寛 塚本 昇 向井 敬一 堀口 順康 山崎 亨 北沢 章生 岡本 十郎 前田 謙吾 多島 容 浅野 正和 新庄 重生 水上 義介 戸田啓次郎 中村 侑 九里 孝雄 池田 卯一 稻村 泰 田村 信一 古賀 哲次	浅田 敬徳 亀井 四郎 齐藤 進六 井上 英雄 桜川 真雄 古海 宏一 岩切 一良 佐々木茂式 上山 節 渡辺 信彦 小林 晃 島村 弘之 江口 民行 西野 忠 齐藤 鶴義 国吉 五六 渡辺 一行 色川 秀勇 吉見 恒雄 菊地 武正 四宮 正善 橋本 亨 渡辺 美博 堀口 武 遠藤 貞 神谷 為一 松本 修 横瀬 信次 中村 純一 増山 久男	油田 恒夫 宗宮 重行 佐多 敏之 渋谷 益男 宇高 斎 石毛健二郎 三好 将造 上原 巨海 木島 昇 藤井 重信 山室 忠臣 河井 信雄 大原 功 江藤 哲夫 友田 正雄 中村 能一 平井 正弘 籠橋 久衛 中村 紀夫 原 真一 高橋健太郎 佐野川 健 二宮 秀明 若島 喜和 田賀井秀夫 田畑 勝弘 河田 幸司 遠藤 正昭 坂野 義郎 大津賀 望	境野 照雄 木村 脩七 武司 秀夫 加藤 誠軌 影山 静夫 高橋 久男 辻 常喜 紀本礼一郎 遠藤 敏夫 冲 和男 小出 儀治 丸茂 文幸 牛尾 欣一 藤村 宗平 石井 峰郎 川浪 重年 藤井 稔 伊藤 彰 塚原 修一 子安 一義 竹村 章 増田 稔 金高 寿男 愛甲 昇 松山 城仁 太田黒宣人 埜崎 堅造 中川 邦好 伊藤 豊成 水野 淳二
500円	山内 尚隆						

合計 579,000円

第14回 Dr. G. Wagener 記念公開学術講演会

昭和51年12月16日(金)に中棟527号講義室において開催された。講師と演題は大阪大学名誉教授、日本学士院会員仁田勇先生の“物理化学の一体系と結晶の研究”およびアメリカマサチューセッツ工業大学教授 W. D. Kingery 先

生の“酸化物の表面および粒界析出現象”で、両先生の長年にわたる御研究をまとめられた報告であり、出席者約200名に多大の感銘を与えた。

(宗宮重行記)

ワグネル先生記念碑の改修について

ワグネル先生は本学窯業関係者にとって忘れることのできない恩人です。先生は1831年ドイツに生れ、ゲッチンゲン大学に学び、有名な数学者ガウス教授に師事して「ポテノーの問題」に関する論文を提出して、21才の若さで、ドクトル・フィロソフィーの学位を得ました。その後フランスに遊学し、明治元年38才のとき来朝して、同3年には鍋島藩に招かれて有田焼の改良を図り酸化コバルトの使用を教授されました。同4年からは大学東校、同南校、東京開成学校、京都府医学校、東京大学理学部等で理化学を講じ、その間明治5～6年にはウィーン万国博御用掛をつとめられ、同16年には旭焼を創製されました。

先生は早くから実業教育の必要なことを力説して当路に建白されたこと一再に止らず、本学の前身東京職工学校に陶器玻璃工科が設置されるや自ら主任官として教育の任にあたられました。同25年11月8日病を得て永眠され青山墓地に葬られました。

先生はまた窯業以外の理工学の広い分野において、たとえば電気メッキ、写真術、石鹼製造、顔料製造、ビール製造、真鍮製造、燐寸製造、染色法等についても実地に指導されました。

東工大原子炉工学研究所横のひょうたん池のほとりにあるワグネル先生記念碑は昭和12年に建立されたものですが、多年の風雪をへて破損が著しく、憂慮すべき状況にあります。

幸にして、伊奈製陶株式会社の御好意で、此度ワグネル先生の陶像が複製されて、大学に寄附していただくことができました。この間の事情については、会長の挨拶の中にくわしく紹介されております。

なお、大学当局も記念碑改修のため、今年度の予算で240万円を計上しておりますので、遠からず昔の姿をとりもどしてくれるものと期待しております。



ワグネル先生記念碑



ワグネル先生陶像

平野陶磁器コレクションについて

平野陶磁器コレクションは明治中期から昭和10年頃に至る我国の近代的陶器工業の発達期における研究試作品および初期の工業製品を集めた貴重なコレクションです。

ここに蒐集されている72点の品々はどれも芸術的価値の高い美術品といったものではありません。明治維新とともに勃興した近代産業技術の発展の過程を示す歴史的遺産であり、はじめての試作品であるとか、最初の工業製品であるという点に大きな価値が認められるのです。

コレクションは、学校および試験場における研究試作品（試）と、工場における初期製品（工）とに分類されており、それぞれに番号がついています。

これらの品々は戦前は本館の塔屋に収納されていたもので、戦後の混乱期に蒐集品の約1/3が失われてしまったことは誠に残念ですが、先頃

整理のうえ無機材料工学科内に資料室を設けて展示しました。

平野耕輔先生は明治24年、本学の前身である東京職工学校の陶器玻璃工科を卒業され、引き続き母校に留ってワグネル先生に師事し、外国留学後は東京高等工業学校の教授および窯業科長として後進の指導にあたり、その後は南満洲鉄道株式会社の窯業試験工場長、商工省陶磁器試験所長を歴任して斯界の発展につくされましたが、昭和12年に退官して永年に涉って蒐集した蔵品を教育参考資料として母校に寄贈されました。

さらに、昭和15年には窯業学科主任として再び母校にもどり、昭和18年には初代の窯業研究所長に就任されましたが、昭和22年病を得て77才の生涯を閉じられました。

コレクションの詳細については、セラミックス誌の本年12月号を御参照下さい。



資料室



平野陶磁器コレクション

試2 旭焼、額皿（雀画）

旭焼は我国における近代窯業の父といわれるワグネル先生の創案になるもので、日本古来の絵画描法を釉下に施した美術的価値の高い低火度焼成陶器です。先生は明治16年からこの研究に着手し、明治18年には農商務省の補助を得て赤坂葵坂に試験工場をつくり、吾妻焼と命名しましたが、明治20年に設備を東京職工学校に移して旭焼と改称しました。試2は明治18年の研究試作品です。

工27 旭焼タイル

明治23年、有志の資本によって旭焼製造工場が東京市深川区東元町に設立され、主として輸出用のストーブ飾タイルを製造していましたが、同29年に経営不振のため工場は閉鎖されました。工27はその製品で我国における最初の半乾式圧搾成形白色陶器タイルです。

平野陶磁器コレクション一覧表

〔1〕 学校、試験所の試作品

番号	品名	製造所	製作年代	備考
○ 試1	旭焼、鉢	ワグネル先生試験工場	明治17年	
○ 試2	旭焼、皿、雀画	同上	明治18年	
○ 試3	旭焼、皿、山水画	東京工業学校試験工場	明治26～27年	
○ 試4	旭焼、皿、鴛鴦画	同上	同上	
○ 試5	磁器染付、茶碗	東京工業学校	明治31年	五連式石炭焼成窯使用
○ 試6	新製マジョリカ、灰皿	同上	明治36～37年	} ドイツマジョリカを模した石灰質陶器
○ 試7	新製マジョリカ、鉢	同上	同上	
○ 試8	新製マジョリカ、額皿	同上	同上	
○ 試9	マジョリカ参考品	ドイツ	明治35年	
○ 試10	磁器試作品、小皿	東京工業試験所	大正初年	} 朝鮮河東カオリン使用 最初の純白硬質磁器
○ 試11	磁器試作品、茶碗	同上	同上	
○ 試12	磁器試作品、皿	同上	同上	
○ 試13	磁器試作品、徳利	同上	同上	
○ 試14	硬質陶器、皿	同上	同上	
○ 試15	硬質陶器、染付絵画、額皿	同上	大正4～5年	
○ 試16	改良素地染付、茶碗	京都市立陶磁器試験場	明治35～36年	
○ 試17	半磁器、花瓶	同上	明治36年頃	栗田陶器の改良品
○ 試18	磁器、花瓶	満鉄中央試験所窯業試験工場	大正2年頃	景德鎮絵付工招聘作品
○ 試19	粗磁器、井	同上	同上	
○ 試20	粗陶器、井	同上	同上	
○ 試21	日本趣味洋食器各種	商工省陶磁器試験所	昭和8年頃	
○ 試22	白雲陶器	同上	同上	ドロマイト使用、軽質陶器
○ 試23	新製高火度釉マジョリカ	同上		
○ 試24	ボンチヤイナ	同上	昭和9年	
○ 試25	陶試紅、金魚	同上	同上	} 高火度用紅色顔料 陶試紅使用
○ 試26	陶試紅、人形	瀬戸某工場製の輸出向玩具		
○ 試27	古来釉試作品、均窯鉢	商工省陶磁器試験所		} 宋および清朝官窯の 再現作品
○ 試28	古来釉試作品、玳皮蓋天目鉢	同上		
○ 試29	ドア押板	同上		} 新規作品
○ 試30	ドアハンドル	同上		
○ 試31	鋸屑焼成磁器、バタ入れ	同上	昭和8～9年	} 特許木質材料粉末未焼成法作品 銅顔料に代る合成顔料使用
○ 試32	陶試辰砂、花瓶	同上	昭和11年	

〔2〕工場製品

番号	品名	製造所	製作年代	備考
エ1	染付、肉皿	有田香蘭社	明治11年	} 最初の機械成形作品
エ2	錦手、肉皿	同上	同上	
エ3	染付磁器、角皿	友玉園加藤友太郎製	明治16年	} 薪材焼成単独窯作品
○エ4	硬質磁器、蓋物	松村硬質陶器株式会社	明治29年	
○エ5	硬質磁器、急須	同上	同上	} 最初の純白硬質磁器 } 特許2797号
○エ6	硬質陶器、肉皿	同上	明治36年頃	
○エ7	硬質陶器、肉皿	同上	同上	} 最初の工業化西洋食器
エ8	硬質陶器、紅茶碗皿	松村硬質陶器株式会社	明治36年頃	
エ9	硬質陶器、水差	同上	同上	}
○エ10	磁器、皿	日本陶器株式会社	明治41年頃	
○エ11	磁器、七寸皿	同上	大正2年	} 第1回トンネル窯焼成品
○エ12	磁器、五寸皿、パン皿	同上	昭和9年	
○エ13	ホーンチャイナ、皿	同上	昭和6年	最初のホーンチャイナ商品
エ14	磁器、肉皿	名古屋製陶所	大正4年	最初のフランス形肉皿
エ15	硬質陶器、花盛器	東洋陶器株式会社	大正9年	} ドレスラー式トンネル窯 } 作品
エ16	硬質陶器、肉皿	同上	同上	
○エ17	硬質陶器、紅茶碗皿	同上	同上	}
○エ18	高压磚子	松風工業株式会社	明治39年	
○エ19	化学磁器、蒸発皿	同上	大正初年	最初の化学磁器
○エ20	陶歯見本	松風陶歯株式会社	大正11年	最初の製品見本
○エ21	白磁、紅茶碗皿	大倉陶園	大正7年	最初の最高級純白洋食器
○エ22	手押成形タイル	淡陶株式会社	明治30年以前	}
○エ23	手押成形タイル	同上	明治40年以前	
○エ24	乾式成形タイル	同上	明治41年以後	
エ25	白雲陶器、タイル	日本タイル株式会社	昭和8年	}
エ26	白雲陶器、肉皿	白川製陶株式会社	同上	
○エ27	旭焼、タイル	旭焼製造工場	明治23~29年	}
エ28	磁器、花瓶	インド		
○エ29	懸垂磚子	日本磚子株式会社	昭和3年	最初のトンネル窯焼成品
エ30	耐酸ポンプ	同上		}
○エ31	点火栓	同上	昭和5年頃	

〔3〕其他

番号	品名	製造所	製作年代	備考
○	光学硝子試作品	海軍造兵廠	大正7年頃	} 最初の光学硝子試作品
○	硝子、コップ各種	満鉄中央試験所窯業試験工場	大正7年以降	
○	硝子、押型製品	同上	同上	}
○	硝子、切子井	同上	同上	
○	硝子、切子灰皿	同上	同上	} チェコ技師招聘作品 } 各務鑑三作品
○	硝子、グラビール灰皿	同上	大正12年	
○	硝子、グラビール花瓶	同上	同上	}
○	硝子、腐蝕花瓶	同上		
○	硝子、赤色花瓶	同上		
○	硝子、赤色花瓶	同上		カドミウム赤試作品

○印のついていない品物は現在行方不明になっております。それらについての情報をお持ちの方がございましたらぜひお知らせ下さい。

東京工業大学における窯業教育の歴史的経過

我国における近代的な窯業教育は本学の前身である東京職工学校において開始された。

明治14年5月26日、浅草蔵前の地に創立された**東京職工学校**には、化学工芸科と機械工芸科とが置かれたが、明治17年に、化学工芸科の専修科目としてワグネル博士による窯業学が開講され、翌18年4月には実習工場が設けられて小型の硝子熔融窯と陶磁器焼成窯とが新設された。明治19年8月には上記の2学科を各専門にわけることになって**陶器玻璃工科**の名が現われ、明治20年にはワグネル博士の関係した赤坂葵町の農商務省陶器試験所が当校に移設された。

明治23年3月、東京職工学校が**東京工業学校**と改められて、ドイツから最新の試験器具を購入し、窯炉、機械等の設備を新設して、明治27年には科名を**窯業科**と改称した。

明治34年5月、東京工業学校が**東京高等工業学校**に昇格したが、その際の6学科のひとつである窯業科の初代科長には工学博士高山甚太郎が任命された。大正3年には、大阪高等工業学校の窯業科を合併して名実共に我国最高の窯業教育機関となり、付属工場を増設し、実験室および実験設備が整えられた。この時代の教官は科長平野耕輔、工場長芝田利八、教授近藤清治および大阪高工から転任の教授金島茂太の諸氏が中心であった。

大正12年9月の関東大震災は窯場以外の窯業科の全設備を灰塵と化した。止むを得ず、窯業科は駒場の帝大農学部に仮住いしたのち、翌年、大岡山駅北側に建てられたバラック校舎に移転したが、しばらくの間は実験もできない状態であった。

昭和4年4月、官立工業大学の官制が制定されて、東京高等工業学校が**東京工業大学**に昇格して、8学科が置かれた。同時に、高工当時の科名である窯業科が**窯業学科**と改められたが、当時の学生定員は25名であった。大学昇格当時の主任教授

は工学博士近藤清治で、翌年には硝子担当の教授として工学博士田端耕造が就任した。また、国産第1号のX線回折装置をはじめとして、各種の最新鋭研究設備が導入されて、研究の意気が大いに上がり、昭和7年には学部第1回の卒業生10名を送り出した。昭和9年5月にはバラック校舎から新しく竣工した本館の建物に移転し、翌年には工場と窯場も完成した。

支那事変の勃発と戦局の進展は窯業技術者に対する需要を急増し、昭和15年4月に**臨時工業技術員養成所**が設置されて、中等学校卒業生を対象として1ケ年の短期間で専門学校程度の教育が開始された。さらに、昭和20年度には**附属工業専門部**の窯業科（定員40名）が開設された。しかしながら、太平洋戦争の終結によって、臨時工業技術員養成所は昭和21年3月をもって閉鎖され、附属工業専門部は昭和23年に第1回の卒業生を出しただけで廃止された。

昭和18年1月には窯業材料に対する研究の重要性が認められて、**窯業研究所**の官判が公布され、所長事務取扱いとして平野耕輔、所長付として教授山内俊吉、専任所員として教授河島千尋、教授鈴木信一その他の諸氏が任命され、学部窯業学科の教官のほとんどが兼任所員となった。

太平洋戦争への突入によって学生生活は大きな影響を受け、勤労奉仕等の出勤が多くなって完全な授業は不可能となり、卒業も繰上げられて昭和16年には3月と12月の2回学部の卒業式が行われ、昭和17年から昭和22年の間は9月卒業となった。

戦争の終結に伴って実施された学制改革によって、昭和24年から**新制大学**が発足し、昭和28年3月には旧制最後の卒業生と新制第1回の卒業生が同時に送り出された。当時の窯業関係の教官は教授山内俊吉、教授河島千尋、教授森谷太郎の諸氏が中心であった。

新制度による大学院は昭和28年度から発足し、窯業関係でも昭和30年に最初の修士課程修了者を、昭和37年に最初の博士課程修了者を送り出した。

本学では、戦後のいわゆる和田改革によって学科制度が廃止されたが、昭和35年にこの制度が復活されることとなって、無機材料工学科の学科名が生れた。なお、学科制度が廃止されていた期間中も、窯業関係の研究室および卒業生の団結は強く、窯業同総会は従前通り維持されていた。

昭和33年3月、窯業研究所と建築材料研究所とを統合、整備して、新たに工業材料研究所が設置された。

昭和33年8月には、山内俊吉教授が学長に就任した。

新制大学の発足とともに、大学の組織と在学学生数は急速に膨脹し、昭和30年7月には工学部か

ら理工学部、昭和42年6月には工学部と理部とに分離した。大学院の組織も、発足当時の大学院工学研究科が昭和31年4月に大学院理工学研究科となり、昭和50年4月には新たに学部をもたない大学院総合理工学研究科が生れた。

現在の東京工業大学は理学部および工学部に合計21の学科をもち、学部学生の定員の合計は774名で、そのうち無機材料工学科の定員は22名である。

これに併置されている大学院理工学研究科の無機材料工学専攻は、修士学生定員16名と、博士学生定員6名をもっている。

長津田地区に建設中の大学院総合理工学研究科は10の専攻から成り、修士学生定員250名、博士学生定員75名をもっているが、窯業関係者は材料科学専攻に所属している。

窯業関係卒業生統計

東京職工学校および東京工業学校時代	
年	卒業生(名)
明治 19 年	2
〃 20 〃	
〃 21 〃	
〃 22 〃	4
〃 23 〃	5
〃 24 〃	7
〃 25 〃	3
〃 26 〃	4
〃 27 〃	2
〃 28 〃	5
〃 29 〃	4
〃 30 〃	6
〃 31 〃	7
〃 32 〃	8
〃 33 〃	3
〃 34 〃	8
〃 35 〃	2
〃 36 〃	3

旧制高等工業学校時代	
年	卒業生(名)
明治 37 年	6
〃 38 〃	6
〃 39 〃	10
〃 40 〃	7
〃 41 〃	11
〃 42 〃	11
〃 43 〃	11
〃 44 〃	11
〃 45 〃	9
大正 2 年	18
〃 3 〃	10
〃 4 〃	25
〃 5 〃	27
〃 6 〃	20
〃 7 〃	13
〃 8 〃	20
〃 9 〃	21
〃 10 〃	24
〃 11 〃	22
〃 12 〃	21
〃 13 〃	19
〃 14 〃	16
〃 15 〃	12
昭和 2 年	22
〃 3 〃	15
〃 4 〃	18
〃 5 〃	18
〃 6 〃	22

窯業関係卒業生統計(続)

旧制大学時代				
年	学部 (名)	選科 (名)	専門部 (名)	技養 (名)
昭和7年	10			
〃 8 〃	7			
〃 9 〃	10			
〃 10 〃	9			
〃 11 〃	12			
〃 12 〃	12			
〃 13 〃	12			
〃 14 〃	12			
〃 15 〃	12			
〃 16 〃	12			22
〃 17 〃	21			22
〃 18 〃	19			26
〃 19 〃	25	1		24
〃 20 〃	24			32
〃 21 〃	22	2		47
〃 22 〃	26	2		
〃 23 〃	23	1	57	
〃 24 〃	17			
〃 25 〃	10			
〃 26 〃	5			
〃 27 〃	18			
〃 28 〃	15	2		

新制大学			
年	学部 (名)	修士 (名)	博士 (名)
昭和28年	17		
〃 29 〃	13		
〃 30 〃	8	1	
〃 31 〃	8		
〃 32 〃	9	1	
〃 33 〃	10		
〃 34 〃	17	1	
〃 35 〃	6	3	
〃 36 〃	13	2	
〃 37 〃	10	1	1
〃 38 〃	7	1	1
〃 39 〃	13	1	
〃 40 〃	12	6	
〃 41 〃	24	4	4
〃 42 〃	23	9	
〃 43 〃	24	13	5
〃 44 〃	23	17	2
〃 45 〃	19	12	5
〃 46 〃	17	14	12
〃 47 〃	25	15	3
〃 48 〃	25	7	4
〃 49 〃	16	9	4
〃 50 〃	26	7	6
〃 51 〃	20	27	4
〃 52 〃	20	30	4

大 岡 山 通 信

現在、東工大は工学部、理学部および4つの研究所から成り立っており、窯業同窓会関係者は工学部の無機材料工学科（5講座）、工業材料研究所（6部門）および原子炉工学研究所（1部門）に所属しています。

学部は理学部が5学科、工学部が16学科から構成されていて、現在約3,400人の学生が在学しています。大学院には理工学と総合理工学の二つの研究科が設置されており、修士課程に約1,200人、博士課程に約400人の学生が在学しています。

また、同大学附属原子炉工学研究所にも無機材料工学関係の一部門が含まれており、大学院の学生定員をもっています。

学部学生と大学院学生を合計すると学生の総数は約5,000人になりますが、これを教育する教授陣並びに円滑な教育研究の運営を補佐する教職員の現在員数は別表のとおりで、学部学生4人に対し教官1人の割合で指導していることとなります。

本学の敷地は総面積約515,000㎡で、そのうち大岡山キャンパスは245,000㎡、長津田キャンパスは190,000㎡です。主要な教育、研究施設の大部分は大岡山キャンパスにあります。長津田の新キャンパスも着々と整備が進み、昭和52年夏までに総合理工学研究科の6専攻と2つの附置

東京工業大学の構成と教職員数

大学の構成		教職員数	
学部	理学部 工学部	学長	1
大学院	理工学研究科 総合理工学研究科	教授	220
附置 研究所 及び 附属 研究施設	資源化学研究所	助教授	192
	精密工学研究所	講師	3
	工業材料研究所		
	原子炉工学研究所	助手	431
	天然物化学研究施設	その他 の職員	711
像情報工学研究施設			
資源循環研究施設			
附属 機関等	附属図書館		
	保健管理センター		
	教育工学開発センター 総合情報処理センター		

研究所が大岡山キャンパスから移転し、近い将来総合理工学研究科の残り4専攻と1つの附置研究所が移転することになっています。

学部は類別入学制をとっており、1年次学生は1類（理学系）、2類（材料系）、3類（応化系）、4類（機械系）、5類（電気系）、6類（建設系）に分かれて入学し、2年に進むときに志望と成績順に各学科に所属します。無機材料工学科（学生定員20名）に進む学生は2類に入学することになっています。2年次および3年次では無機材料工学の基礎および専門科目について勉強し、4年生になると各研究室に所属して卒業研究に従事します。

学部学科及び類別学生定員

学部	類	学科名及び定員	類別定員	
理学部	第1類	数 学 20	153	
		物 理 学 25		
		化 学 40		
		応 用 物 理 学 34		
		情 報 科 学 34		
工学部	第2類	金 属 工 学 34	74	
		有 機 材 料 工 学 20		
		無 機 材 料 工 学 20		
	第3類	第3類	化 学 工 学 75	118
			高 分 子 工 学 34	
	第4類	第4類	経 営 工 学 34	170
			機 械 工 学 60	
			生 産 機 械 工 学 34	
			機 械 物 理 工 学 34	
	第5類	第5類	制 御 工 学 34	146
電 気 ・ 電 子 工 学 55				
電 子 物 理 工 学 34				
第6類	第6類	情 報 工 学 40	113	
		土 木 工 学 34		
		建 築 学 45		
		社 会 工 学 34		
		計	774	

大学院は、大岡山地区に併置されている大学院理工学研究科無機材料工学専攻が、修士課程学生定員16名、博士課程学生定員6名をもち、化学工学専攻、および高分子工学専攻と共同で運営されており、学生定員の1/2は学内推薦で、のこりは一般選考によって充足しています。大学院総合理工学研究科に属する材料科学専攻は、従来からある工業材料研究所を母体として新設されたもので、学際的研究分野をカバーするという新しい構想に基づいて昭和50年に生まれた学部をもたない大学院で、昭和54年度中には長津田の新キャンパスに移転する予定です。

また、同大学附属原子炉工学研究所にも無機材料工学関係の一部門が含まれており、大学院の学生定員をもっています。

なお、今年から無機材料工学科の各講座の名称が別表のように改正されました。

工業材料研究所では水熱合成材料実験施設の新設が認められて、平野真一氏が助教授に昇任し、また高純度材料部門の教授として斎藤安俊氏が就任されました。

東工大では、ここ数年は無機材料の学部を卒業した後直ちに就職する者は数名程度で、大部分は上記大学院の専攻のいずれかに進学しており、今後は東工大出身者のほとんどが修士課程卒業者によって占められることになると考えられます。

なお現在のわが国で、窯業関係の技術者を組織的に養成している大学は、本学の他に名古屋工業大学および京都工芸繊維大学を数えるだけで、大学院博士課程の置かれている大学は本学に限られています。

大学院研究科の専攻名

理工学研究科	総合理工学研究科
数 学	物 理 情 報 工 学
物 理 学	電 子 化 学
化 学	社 会 開 発 工 学
応 用 物 理 学	精 密 機 械 シ ス テ ム
情 報 科 学	材 料 科 学
金 属 工 学	電 子 シ ス テ ム
繊 維 工 学	化 学 環 境 工 学
無 機 材 料 工 学	生 命 化 学
化 学 工 学	エ ネ ル ギ ー 科 学
高 分 子 工 学	シ ス テ ム 科 学
機 械 工 学	
生 産 機 械 工 学	
機 械 物 理 工 学	
制 御 工 学	
経 営 工 学	
電 気 工 学	
電 子 工 学	
電 子 物 理 工 学	
土 木 工 学	
建 築 学	
社 会 工 学	
原 子 核 工 学	

窯業関係の在学生数

学 年		(名)
大 学 院	博士課程 3 年次	2
	博士課程 2 年次	10
	博士課程 1 年次	11
	修士課程 2 年次	21
	修士課程 1 年次	25
学 部	学 部 4 年 次	20
	学 部 3 年 次	22
	学 部 2 年 次	18

東京工業大学における窯業関係の学生定員 昭和52年度

教 育 機 関	講 座 数 (部門数)	学 部 学生定員	修 士 学生定員	博 士 学生定員
工学部無機材料工学科	}	20	16	6
大学院理工学研究科 無機材料工学専攻				
同 上 原子炉工学専攻(無機材料関係)	1	0	2	1
大学院総合理工学研究科 材料科学専攻(無機材料関係)	6	0	12	6
大 学 全 体		774	619	221

東京工業大学無機材料工学関係職員一覽

工学部 無機材料工学科

講座名	教授	助教授	助手	技官・事務官
無機合成材料	加藤 誠軌 ☎2518	水谷 惟恭 ☎2518	太田 京一郎 太植 松敬三	松山 勝美
結晶質材料	宇田川 重和 ☎2520		大津 賀望行 大井 川博	荒井 路子
非晶質材料	境野 照雄 ☎2522	山根 正之 ☎2523	井上 悟	山本 孝子
鈹産原料	小坂 丈予 ☎2524		浦部 和順 虎谷 洋子	平林 順一
材料加工学	近藤 連一 ☎2376	大門 正機 ☎2376	後藤 誠史 浅賀 喜代志	大沢 栄也
学生実験室 工場			林 剛	上西 義介 桜井 修

原子炉工学研究所

部門名	教授	助教授	助手	技官・事務官
原子炉燃料	鈴木 弘茂 ☎3066	井関 孝善 ☎3069	丸山 忠司 向原 進	長谷 貞三 今井 雅三

工業材料研究所

部門名	教授	助教授	助手	技官・事務官
結晶体物性	岩井 津一 ☎2371	丸茂 文幸 ☎2373	森川 日出貴 田中 清明	湊 一郎
無機焼成材料	浜野 健也 ☎2372	木村 脩七 ☎2387	安田 栄一 中川 善兵衛	長谷川 美憲
無機熔融材料	佐多 敏之 ☎2384	中村 哲朗 ☎2377	吉村 昌弘 笹本 忠 鎌田 喜一郎	小林 迪夫
高純度材料	斎藤 安俊 ☎2364	星野 芳夫 ☎2378	宇都宮 泰造	佐々木 清裕
超高压高温材料	齋藤 進六 ☎2382	沢岡 昭 ☎2383	近藤 建一 鈴木 健之	吉永 善子
合成無機材料	宗宮 重行 ☎2380	今井 久雄 ☎2381	高見 敬一 伊藤 義孝	伊藤 秀一
水熱合成材料 実験施設	宗宮 重行 ☎2380	平野 真一 ☎2363		

☎内線電話番号

あ と が き

新しい名簿と会誌をお届けします。

今年のビッグニュースは常任理事の齋藤進六先生が本学の学長に選出されたことで、名簿の編集も終わった段階ではありましたが、特にお願いして皆様へのご挨拶を書いていただきました。

今回の名簿作成にあたっては、できるだけ見易く、引き易いものにと心掛けたつもりですが、会員の異動がはげしく、住所確認のアンケート葉書の回収率も50%程度で、かなり多くの方々が消息不明となっていることは大変残念です。古い時代の卒業生や元教官等については相当数の方々が名簿から脱落していることが判明しておりますが、それらは次回までに調査のうえ訂正することに致しました。名簿の間違い、行方不明者の消息その他お気付のことがあればぜひお知らせ下さい。

また今回の会誌には、若い会員の諸氏を対象として、「窯業同窓会の沿革」ならびに「東京工業大学における窯業教育の歴史的経過」を掲載しましたので、諸先輩の努力経営のあとを偲んでいただければ幸いです。名簿作成の費用は、前回に比べて頁数が40頁以上増加したこともあって、広告料だけでは賄い切れず大巾な赤字を出してしまいました。このところ卒業生が急増しておりますので、次回からは特別な予算措置が必要になると考えられますが、今回は前年度からの繰越金によって赤字を補填し、名簿代と送料は特別には徴収しないことと致しました。

以上のことをお含みのうえ本会の事業にご協力いただけます場合には、同封の振替用紙で事業資金(1口1,000円以上)をご送金下さいますようお願い申し上げます。

(加藤 誠軌)

事業資金のご送金は下記にてお願いします。	
銀行振込の場合	第一勧業銀行 大岡山支店 普通預金口座、口座番号 1257281 東京都目黒区大岡山 2-12-1 東京工業大学内 窯業同窓会 小坂丈予
郵便局振込の場合	口座番号 東京 0196855 窯業同窓会

昭和52年11月10日印刷

昭和52年11月25日発行

発行者 窯業同窓会

編集者 加藤 誠 軌

印刷所 有限会社極光印刷